

## 平成 30 年度 校内研修の計画

### 1 研修テーマ

#### 「わかる」・「できる」主体的な学び合いを通して

### 2 昨年度の校内研修から成果と課題

本校では、各種研修アンケートや学力・学習状況調査の結果を踏まえ、生徒が主体的に学ぶ、能動的に学ぶ学習を推進していくことが必要であるとの認識に立ち、《「わかる」・「できる」主体的な学び合いを目指して》というテーマに発展させて研修を推進してきた。

平成 29 年度研修は、そこに他者とのつながりの要素を加えて《「わかる」・「できる」主体的な学び合いを目指して》とした。「わかる」「できる」は、子どもにとって達成感や学ぶ喜びにつながる、学びの実感を伴った授業を表している。そのような学びの実感を得るためには、教師の授業改善を進めるとともに、子ども自身が主体的に学ぶことが大事である。子どもが主体的な学びを行えば周りのことが気になり、必然的に対話が生じ、学び合いになっていくであろうということで「学び合い」とした。

昨年度年 3 回行った研修アンケートでは、「わかった」「できた」と回答した生徒の割合は、どの学年も「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせた肯定的な評価が年度当初より上がっていた。また、授業改善に熱心に取り組んだ教科においては、肯定的な評価が増していることに加え、「まったくそう思わない」という強い否定的な評価も減ってきた。昨年度の重点であった「協働的な学び」と「生徒の思考を支える可視化」も授業の中で定着してきている。これを今年度も継続させ、更に充実させていきたい。

3 年生が行った平成 29 年度の学力・学習状況調査の結果をみると、数学は A B 共に国や県の平均を上回った。しかし、国語 B においては、書く能力をはじめとする「記述式」に大きな課題が見られた。目的や意図に応じて集めた材料を取捨選択して、自分の考えをもつことや、条件にあった的確な表現を用いて、自分なりに説明し、伝え合うことが苦手ということが見て取れる。

このように、学力・学習状況調査の結果を踏まえれば、今後も生徒が主体的に学ぶ、能動的に学ぶ課題解決型の学習を推進していくことが必要であると考え。特に、対話を通じた学び合いの充実がさらに求められていくと言える。

### 3 テーマ設定の理由

#### (1) 研修テーマについて

平成 30 年度の研修テーマは、《「わかる」・「できる」主体的な学び合いを通して》とした。主体的な学び合いがゴールではなく、主体的・協働的生き方となる基礎であり、目標へ向かうための通過点である。その、「過程」とする考え方の下、テーマを上記のように変更した。今年度の重点の 1 つである「協働的な学び」をさらに充実させるには、思っていることを言い合うだけの会話ではなく、それぞれの意見をもとに課題を解決したり、互いの影響を受けつつ高めあえたりする対話が大切であり、「学び合い」という姿勢が重要となる。また、自分の意見を表現するために必要な語彙力を向上させるためには、本やメディアから意図的に吸収するか、他者とのコミュニケーションを通じて吸収していく必要がある。思考の基盤

を支える語彙力を向上させていくためにも、「主体的」で「学び合える」環境を目指すことが重要であると考えます。

提案授業や公開授業を行っていく中で、中学校の教科指導は横断的な見方や考え方が弱い傾向にあることも見えてきた。このため、本年度は教科横断的な視野も入れ、研修を進めることとした。

## (2) 仮説

教師が生徒の実態等を踏まえた上で、授業で生徒に「付けたい力」を明確にし、四つの学習段階を踏まえた課題解決的な学習を展開することや協働的な学びの充実や生徒の思考を支える可視化などの対話を生かした仕掛けによって生徒は主体的に学び合うとともに、学び方についても学び、「確かな学力」を身に付けることができるだろう。

研修テーマ「「わかる」・「できる」主体的な学び合いを通して」のために、これまでと同様に各教科等において、基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得、それらを活用した思考力・判断力・表現力等の育成をするよう授業実践を積み重ねるとともに、その学びが、これまで以上に生徒にとって主体的（能動的）なものとなるように授業改善を推し進める。

そのために、まず、本校の生徒一人一人の学びに真摯に向き合い、本時の学習に対する生徒の実態（既習内容の定着度、経験の有無、イメージ、思考傾向、人間関係等）を確実に把握していくことが大事になってくる。そして、授業で「付けたい力」を明確にし、教科等の特性や生徒の実態をもとに、課題解決的な学習の流れに沿って、生徒の学習の四つの段階「つかむ」「見通す」「追究する」「まとめる・振り返る」の活動を、それぞれの時間的な配分（バランス）や学習成果等に配慮しながら展開していく。

また、後述するが、研修の重点である「協働的な学びの充実」「生徒の思考を支える可視化」を授業の中に意図的に仕掛けることで、生徒が自信をもって自発的に表現したり、学びを深めたり、自らの課題に向かって学び続けたりすることができるであろうと考える。

これらの生徒の変容や授業改善の成果・課題については、学習記録や研修アンケート、振り返りカード、テスト結果、中心授業を参観した教師の感想・意見等によって検証する。

## 4 授業の四つの段階

授業を学習内容により大別すると、系統的学習、習熟的学習、問題（課題）解決的学習等に分けることができる。どの内容の授業においても生徒が主体的に学ぶ、学び方を学ぶことができる学習過程（学習段階）を、「つかむ」「見通す」「追究する」「まとめる・振り返る」の4段階と設定した。これらは県教委の授業改善の視点「押さえる」「仕掛ける」「確かめる」を踏まえたものになっている。静西教育事務所では、さらに「一人一人の学びの姿に目を向ける」「一人一人に目的意識や必要感をもたせる」「子供の姿を思い描いて授業を構想する」の3つの視点を基に授業を見直していくよう提言されている。本時の目標や学習内容、生徒の実態等を踏まえた上で、「生徒が主体的に学ぶ」ように授業を構想することが大切である。

### (1) つかむ

- ・本時の学習課題を生徒が「つかむ」段階。この段階が最も重要。
- ・生徒が面白そうだ、やってみたい、なぜだろうなどという内発的動機付けや知的好奇心の揺さぶりが大切。
- ・導入部分であるため、他の段階の学習活動を考慮すると学習活動は1つか2つ程度。
- ・単元全体で動機付けがなされている場合（すでに生徒が学習内容を理解している場合）などは、教師が学習課題を提示する場合もある。

## (2) 見通す

- ・生徒が学習課題を追究するため、予想立てをしたり、学習の手順等を確認したりする段階。
- ・「つかむ」段階で喚起した意欲を減衰させないよう活動を工夫する必要がある。
- ・単元全体で学習活動が示されていて、生徒がすでに理解している場合は、確認のみの活動になる場合もある。

※「つかむ」「見通す」段階で、ただ単に「これをする」ではなく、「このため（学習課題の解決）にこれをする（学習内容、学習方法、手順等を見通す）」という意義付けをして、生徒が主体的に取り組んだり、学び方を学んだりできるようにする。

## (3) 追究する

- ・生徒がつかんだ学習課題を、見通した方法で追究する段階。
- ・生徒の実態に応じて、学習形態を工夫し、生徒が学習課題を追究できるように構想する。（個別、ペア、グループ、習熟度別、予想別、役割分担等）
- ・生徒が学習課題を追究するための、教師の支援方法にも留意する。（机間指導、個別指導、T・T、教材・教具等）
- ・「つかむ」「見通す」ことができていても、すべての生徒が教師の支援なくして「追究する」ことができるわけではないことに留意する。そのため、生徒の活動の状況を常に把握する必要がある。（複線化、コース別、課題別等の授業形態、教具等を工夫したい。）
- ・この段階の活動に多くの時間を費やすものと思われる。50分の3分の1以上か。

## (4) まとめる・振り返る

本時の学習課題を追究した内容をまとめる段階。また、本時の学習全体を振り返る段階。

### （まとめる）

- ・本時の学習課題に対して、学習したことをまとめる段階。
- ・できるだけ生徒の言葉を取り上げてまとめる。（教師が補足しながら）
- ・「学習課題」（青チョーク）と「まとめ」（赤色チョーク）を構造的に示す。（教科によっては、実物や言語、フリップ等で）
- ・この活動では、本時の目標に対する生徒の達成度の評価（評価基準による評価、）を教師が行う。ただし、学習内容によっては到達度評価の場合もある。必要があれば、補足説明等を行う。

### （振り返る）

- ・本時の学習について、生徒が振り返る段階。
- ・本時の学習課題に対する評価、本時の取組に対する評価など、生徒が自らを振り返る。（個人内評価を含む）
- ・まとめる段階で行っていない場合、本時の目標に対する生徒の達成度の評価（評価基準による評価）を教師が行う。必要があれば、補足説明等を行う。

## 5 研修の重点項目

### (1) 協働的な学びの充実

お互いの個性を尊重しながら、子どもたちが互いに教え合い学び合うことで、相乗的な教育効果をあげる協働的な学びのこと。

- ① 考えや作品を提示・交換しての発表や話し合いをする。
- ② 複数の意見や考えを議論して整理する。
- ③ グループでの分担や協力により作品制作をする。
- ④ 学校の壁を越えた学習＝遠隔地の学校等との交流などが挙げられる。

## (2) 生徒の思考を支える可視化

現状や進捗状況などを常に把握できるような状態にしておくことや、一見ただけでは分かりにくい様々な状況を、文字・図表による見せ方を工夫することにより、生徒自身が問題点を把握しやすし、進んで学んでいけるようにすることを本校では「可視化」と呼ぶ。

例) 板書の色分けの約束事の明確化 動かしながら考えられるような教具の準備など

## 6 研修の基盤

### (3) 教科横断的な学びを意識した指導のあり方

教科担任制では、教師は自分の受け持った教科のみを教えるため、その教科の面白さ、奥深さを追求することができる。しかし、追求できる反面、他の教科とのつながりが薄れがちになってしまうのも事実である。生徒は全ての教科を平行して学習している。それらの知識を横断的に使用しながら学習を進めることができれば、より深い学びにつながり、実感を持った理解になると考える。教科横断的な学びにするためには、まずは教師側が他教科の特性や、学習内容を知ることが必要となる。自分の担当する教科を追求してだけでなく、他教科に触れたり、他教科の教師の意見を聞いたりする機会を設けることで、教科横断的な学びを意識できるようにしていきたい。

### (4) ベテランと若手をつなぐOJT

本校の職員構成はU字型のように、ベテランと若手の人数が多く、中堅が少ない。若手にベテランの指導技法を伝えていくことや、教科を問わず授業に生かせるちょっとした工夫を共有化するために、本校でもOJT (On the Job Training) が必要であると考え。中学校の現場は、放課後も部活があり時間の確保が難しい面があるので、校内研修の中で、年間数回の講義・講座を設けることで、教師にとっても「協働的な学び」につながると考えている。

## 7 本校の研修をとりまく諸課題

### (1) よりよい集団づくり

#### ① 基本的な生活習慣・学習習慣の定着

基本的な生活習慣や学習習慣の定着は、安定した学校生活には不可欠である。本校は、大変落ち着いた学校であり、生徒が様々な活動に積極的に取り組んでいる。基本的な生活習慣・学習習慣が定着していることが、生徒の活動を支えている。今後も学校生活全体を通して、生徒一人一人の基本的な習慣の定着を図るとともに、習慣の定着を促進するための生徒の自治的・自発的な活動を推進する。また、家庭における学習についても、量だけでなく質的な充実を図っていく必要がある。

#### ② 人権感覚の醸成（福祉の神明）

本校区は、四つある交流センター（旧公民館）を中心とした地域の活動が盛んで、生徒が活動する場面を多く設定していただいている。また、アクティブ・タイム（総合的な学習の時間）を中心として、施設訪問などの福祉活動への取組により、身に付けた力を他者のために役立てる活動を通して自己有用感を高めるとともに、他者の立場に立つてものごとを考えるなどの人権感覚を醸成してきた。

また、本校には外国人生徒が多く在籍し、多文化が共生しているため、生徒理解や保護者との協力場面では、人権感覚がより所となることが多い。よりよい集団づくりのために、これまで以上に、人権感覚を醸成していく。

(2) 小中一貫教育の推進（9年間を見通した学びを生かす教育 <みやのもり学府の教育>）

本校区は「みやのもり学府」として、小・中一貫教育を昨年度から本格実施した。小学校6年間と中学校3年間の9年間で、児童生徒に「付けたい力」は何かを明確にした取組が必要になってくる。教育課程や英語活動の連携が先行しているが、あらゆる教育活動で連携を深めていくとともに、小・中学校がそれぞれに指導すべきものを再確認し、教育実践に生かしていくことが大事である。

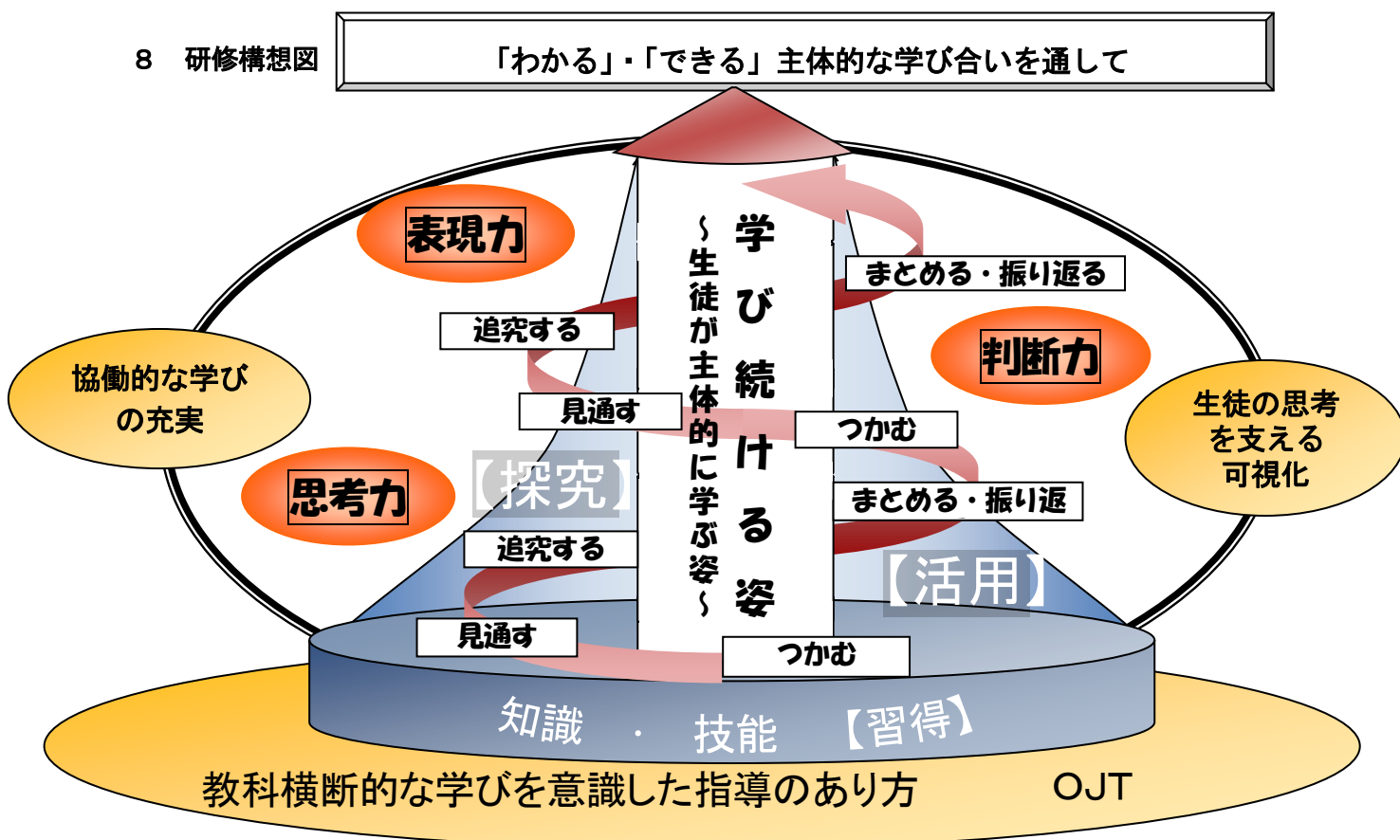
(3) 指導と評価の一体化

学校においては、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら、生徒のよりよい成長を目指した指導が展開されている。よく言われるように指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。評価活動を評価のための評価に終わらせることがないように、各教科で年間指導計画と評価規準を見直し、授業改善を推進していかなければならない。適切な指導と評価によって、研修テーマに迫る生徒の主体的な学びにつながっていくと考えられる。

また、本校の特徴として、外国人生徒の割合が全体の一割弱程度いることと、特別支援教室が知的・情緒それぞれ設置され、入級者の割合も年々増加傾向という現状がある。どのような立場の生徒にも一定の学力を補償し、主体的な学びにつなげていくためには、国籍や発達の課題の有無、成長の過程で生じる身体的、精神的な不安感情などに対する理解がますます必要になってきている。一昨年度から、「人間関係づくりプログラム」を導入し、これまで以上に生徒の変容を見取り、生徒同士の人間関係づくりをサポートしているのもその一環である。このプログラムを活用し、生徒の実態をきちんと把握した上で、自由な意見を言い合ったり、他と違う考えや感性を尊重し合ったりする学習環境を構築していくことで、研修テーマにある生徒の主体的な学びにつながっていくと考えられる。

さらに、学校関係者評価や学校運営協議会の意見等を学校教育活動に反映するなど、「わかる、できる」主体的な学び合いを目指し、よりよい学校づくりのため、不断の見直しを図っていく。

8 研修構想図



## 9 校内研修組織

校長、教頭、教務主任、研修主任、研修部員により研修推進委員会を組織する。

### 研修主任

- 校内研修会、研修推進委員会の企画・運営      ○研究授業推進      ○学校訪問等対外研修対応
- 県版カリキュラムの活用      ○教科年間指導計画・観点別評価規準による評価
- 教科指導案作成・点検（学活、道徳、特活は各主任）      ○研修関係資料整理・保管
- 研修費執行

### 学習部長

- 長期休業中の学力補充の企画・運営
- 学力向上支援（基礎学力向上テスト（とことんテスト）等）

### 研修部員

- 校内研修会の運営      ○研修推進委員会への参加      ○研修写真、記録、掲示
  - 各学年での研修推進      ○研修関係資料印刷、綴じ込み      ○指導案の点検
- ※研修の内容、方法によっては、上記の方以外にも協力していただくこともあります。

## 10 研修の方法（全体・グループ・教科部会）

- ・全体研修（全体に関わることの説明やまとめ）
- ・グループ研修（課題へのアプローチ、領域等でグルーピングをし、ワークショップ研修をする）
- ・教科部会（教科での検討、教科の視点からのまとめ）

### 【校内研修の年間計画案】

**校内研修**      全体研修会…7回、グループ会…4～5回、教科部会…1～2回  
 神明中学校区研修会（小中合同研修会）…1回

回	研推日	校内研修日	研修内容
1	4/10(火)	4/18(水)	<b>全体研修会</b> ・基本構想（テーマ、重点、組織、研修内容他）、指導案形式の提示 <b>グループワーク</b> ・研修グループの決定（チャレンジ項目ごとに、他教科で4人程度のグループを作る）項目例…ICT、道徳、読書教育 等 ・「授業を見せ合う会（仮）」の計画作成 （生徒へ年度当初学習アンケートの実施…次回研修までに）
2	5/14(月)	5/30(水)	<b>グループワーク</b> ・提案授業実践の計画と準備（研推時） ・提案授業を終えての話し合い、検討、反省
3	6/18(月)	6/27(水)	<b>全体研修会</b> ・人権教育研修（パンフレットを活用して） ・進捗状況確認 <b>グループワーク</b> ・見せ合う会に向けての話し合い、検討、反省 （生徒へ1学期末学習アンケートの実施…次回研修までに）
4	7/9(月)	8/6(月)	<b>全体研修会</b> ・道徳の教科化に向けての研修会 ・1学期末アンケートをもとにした検討会

5	9/10(月)	10/ 1(月)	<b>教科部会</b> または <b>グループワーク</b> ・教科部会での実践の共有化 ・検証方法の再検討を必要に応じて行う。
6	11/12(月)	11/ 21(水)	<b>グループワーク</b> ・視点の検証とまとめ ・グループとしての検証とまとめ ・次年度の研修に向けての意見集約 (生徒へ2学期末学習アンケートの実施、教師へ個人の実践記録実施)
7	12/21(金)	1/ 16(水)	<b>全体研修会</b> <b>グループ発表会</b> ・研修のシェアリング (グループごとの研修結果報告)
8	1/29(火)	2/ 6(水)	<b>全体研修会</b> ・次年度の研修内容の検討

- ・ 研修推進委員で話し合い、決定した授業者が提案授業をする。教務と検討して日程を組み、全員で参観・協議を行う。教育支援課の訪問等が設定された場合は、これに合わせた形で行う。
- ・ 「授業を見せ合う会 (仮)」は、全員が1人1回以上行うこととし、授業の参観、事後研修を同じグループのメンバーが全員で行うことを原則とする。その際の指導案は、「見せ合うシート (仮)」のみでよしとする。
- ・ グループごとに研修の結果報告を、代表一名がA4用紙1枚程度にまとめる。その際、生徒にアンケートをとっておくなど、数値化できる根拠を提示できると望ましい。
- ・ グループ会は教科・領域別部会を基本とするが、次年度の最初の話し合いの中で必要性があれば教科群や子どもの学びの文脈から派生したグルーピングも考慮していきたい。

## 11 校内研修の評価

研修の重点と内容が適切であったかを評価し、次年度に活かす資料とする。

### (1) 生徒側

- ・ 年度当初学習に関するアンケート (学習に関する期待値、1か月時点での手ごたえ)
- ・ 1学期末学習に関するアンケート (1学期を終えた時点での「わかる」・「できる」・「楽しい」・「主体的な学び」の評価)
- ・ 2学期末学習に関するアンケート (2学期を終えた時点での「わかる」・「できる」・「楽しい」・「主体的な学び」の評価)

### (2) 教師側

- ・ グループワークの成果と課題 (A4判1枚でグループ長がまとめる。)

#### <この後のグループ研修会について>

- ・ グループごとに任意の場所で開いてください。
- ・ 年間を通して、グループごとに意識していくことを具体的に決めてください。
- ・ 指導案において、学習の四つの段階それぞれにどんな留意・配慮をすればよいか、指導方法の工夫としてはどんな例が考えられるかを考えてください。
- ・ 各グループで、授業公開 (授業を見せあう会) を実施しますので、誰がいつの時期に、どのような内容で行うかを検討してください。
- ・ グループ代表者は、話し合いの内容をまとめ、データで提出をお願いします。

※ データの入力はサーバー教師用-02. 研修-0H30 校内研修-グループ会記録へ